



郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

宮城県高校野球の暗黒時代からの夜明け

仙台市民図書館郷土資料担当 渡邊 啓市

今年2024年は、阪神甲子園球場の開場100周年にあたるそうです。甲子園と言えば高校球児にとって、あこがれの聖地ですが、高校野球の歴史を振り返ると、その記念すべき第1回大会（当時、全国中等学校優勝野球大会という名称で大阪府の豊中グラウンドで行われた）では東北地方の代表として出場した秋田中学校（現・秋田高等学校）が準優勝に輝きました。しかし、その後の東北地方の代表はなかなか全国大会で決勝の舞台には立てず、宮城県の学校においては、第15回大会まで一度も勝つことができませんでした。そこに全国制覇の野望を抱いて登場したのが、東北高校野球部の育ての親と言われた松尾勝榮（栄）氏です。

松尾氏は1930（昭和5）年に東北高校の監督に就任。厳しい練習が深夜まで及ぶこともあったのですが、「苦しさに耐え抜いてこそ喜びを得られる」という監督の言葉に励まされ、わずか3か月余りで念願の甲子園に出場し、1勝をあげたのでした。翌年、監督を退任するも、1954（昭和29）年、再び東北高校の監督になることを決意し、当時の校長からも過去の甲子園に導いた実績等が評価され、1968（昭和43）年まで指導者として務めあげました。

最初の頃はカンカン帽をかぶり、背広かワイシャツという姿でバックネット裏に陣取り、選手への指示を出していたということですが、甲子園に出場が決まると大会関係者から「ユニフォームを着ないとベンチに入れない」と指示があり、渋々ユニフォームに袖を通したというエピソードがあったそうです。そして、1958（昭和33）年から1961（昭和36）年まで4年連続して夏の甲子園に出場するなど、チームを強豪校に育て上げたのでした。その時の新聞のインタビューで松尾氏は「東北人としては、関西地方と同じ野球をやっているとは思えない。冬将軍がすぐきて、練習時間は西の方の3分の1だ。だから私は校長と一緒に東北式の野球をつくった。（中略）東北人はすべてに立ち遅れているような気持ちを私は野球で捨てさせてみせる。それに自信を持たせたいという気持ちでいっぱいだ」と語っています。また彼は、甲子園での優勝は運不運のつきまとう困難な大事業であり、人間的に優れた人物でなければ成し遂げられないとの思いから、野球技術よりも選手の人物育成に重点を置いて指導し続けました。しかし全国制覇の夢を果たすことは叶わず、自らの持病もあって、後に高校野球の名将として知られる竹田利秋氏にその思いが引き継がれることとなります。

<参考図書>

- 『白球夢を追う みやぎ・野球人の軌跡』高橋 義夫・五十嵐 直治／著 S78㌿
- 『東北高等学校硬式野球部100年史』東北高等学校硬式野球部100年史編纂委員／編 S78ト
- 『青春のうた 東北高校』毎日新聞仙台支局／編 S37ト



■ある日のレファレンスから

前号の「郷土のかぜ」の巻頭で寺木定芳という人物について紹介いたしました。その際は、紙面の関係で取り上げなかったのですが、寺木定芳の父親の事について少し補足したいと思います。

若い頃の定芳の父は、後に仙台市長となる早川智寛が設立した早川組に入り、1890（明治23）年、東四番丁と南町通の角地にあった「仙台座」の建築工事を担当し（仙台座設立の発起人にも名を連ねています）、1年がかりで竣工させた人物でした。後にその建物は大規模改修を行い、ルネッサンス風の外観と回り舞台や升席・棧敷席・両花道を備えた市内最大の芝居小屋となったのですが、1945（昭和20）年7月10日の仙台空襲で、その豪華な建物はすべて焼失してしまいました。

ちなみに、早川組は1893（明治26）年に廃業。その後は、橋本組（現在の橋本店）と定芳の父が率いる寺木組に分かれましたが、両者は東北地方の土木・建築工事の多くを請け負い、巨万の富を得ていました。そのため、息子である定芳（父の名を継ぐ前の本名は^{はじめ}甫）はその育ちの良さから、小説の師匠であった泉鏡花夫妻から「坊ちゃん」と呼ばれ、愛されていたそうです。

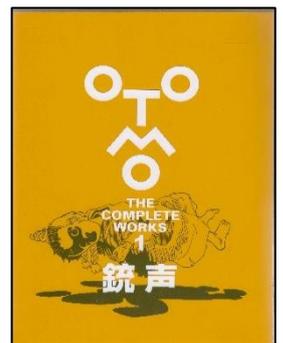
■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『OTOMO THE COMPLETE WORKS 1 銃声』

大友 克洋／著 講談社 S72オ

宮城県出身の漫画家・大友克洋氏の作品が全集で復刻されました。大友氏は1973年のデビュー以来、圧倒的な画力と構成力で時代を反映した漫画作品を多く発表してきました。代表作である『AKIRA』は、アニメ化もされた作品なのでご覧になったことがある方も多いのではないのでしょうか。

第1巻ではデビュー作『銃声』のほか、初期短編と未発表の漫画が掲載されています。続巻ではシナリオやアニメの原画など全ての作品が掲載予定で、全集を通して表現者・大友克洋氏の全軌跡を辿ることができます。ぜひお手に取ってご覧ください。



『語り継がれる明治天皇の東北・北海道ご巡幸』

伊達 宗弘／著 銀の鈴社 S28夕

1876(明治9)年、明治天皇が東北各地を訪問した2か月間の記録。天皇ご一行をたくさんの方がお出迎える様子や、それぞれの地域における出来事、地元住民と和歌を通して交流を図ったことなどが詳細に記されています。単に地方視察というだけでなく、国民にとっては、天上の人と思われていた天皇を身近に感じる事ができた大きな出来事でした。仙台での滞在は4日間。西公園下で開催された博覧会で、支倉常長が持ち帰った品々が訪れた人々から注目を浴び、慶長遣欧使節が世に知られるきっかけとなりました。「国民のおくりむかへて行くところさびしさ知らぬ鄙の長みち」 明治天皇の和歌に込めたおもいが心に響いてくる一冊です。



■編集後記■ 今回は阪神甲子園球場の開場100周年ということで、地元の高校野球発展の礎を築いた東北高校の松尾元監督を取り上げました。松尾氏が亡くなった後、彼の功績を讃え、東北高校野球部のグラウンドには部員たちのプレーを見守るように松尾氏の銅像が立てられました。その松尾氏が高校野球の舞台から離れて以後、東北地方の代表は甲子園での決勝の舞台に何度も進出しながら、敗れ続けました。しかし、松尾氏の悲願であった全国制覇は、2022年の夏に仙台育英高校の選手たちによって達成されたのでした。

発行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地：仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585